
とある人々の主張

海月くらげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある人々の主張

【Nコード】

N1307I

【作者名】

海月くらげ

【あらすじ】

とある人々の、心からのどうでもいい叫び、聞いてみませんか？

とある心理学者の憂鬱

「ニンゲンの心って不思議だよ」

「まったくもって予想がつかない」

「キレるって言葉があるだろ？あれってさ、その時にいきなり限界がくるんじゃないかって、少しずつ積もった何かに、何かがきっかけて火を点けて爆発するんだと思う」

「その時は、そのきっかけによって『キレた』けれど、もし、何かがそこまで積もっていなければ爆発しなかったかもしれない」

「つまりは『きっかけ』がわかったとしても、いつ、爆発するかなんてわからないんだ。本人にさえね」

「それまでの経験や体験、状態がわからなければ、どんなに優秀な心理学者だって、相手の心を理解することなんてできない」

「人間の心ほど、複雑で単純で深淵で浅薄で暗くて明るくて優しく残酷で美しくも醜悪で愉快で不愉快なものはないね」

「ぼくはいつも言いたいと思っているんだ」

「不思議なモノや謎を探している人たちに」

「隣人を見る」

「そこには神秘が眠っている！とね」

「人間にはありとあらゆる可能性が眠っている！手に届くところに最大にして最高の不思議があるんだ！天国も地獄も歓喜も悲哀もすべてヒトが作った！これ以上に興味深いモノはない！人間はひとりひとりが広大にして深遠な宇宙なんだよ！実際の宇宙なんか観ている場合じゃない！！」

「…で、なんで覗きなんてしたのかな？」

「いやだから、女性の神秘がだね」

「困るんだよねえ、春先は特に多くて」

とある町の交番で、とある心理学者が、望遠鏡を抱えたまま職務質問されていた。

とある消費者の羨望（前書き）

相変わらず・・・どうでもいい主張です！

とある消費者の羨望

「ねえ、姉ちゃん」

「ん？」

「今ポテチ食べてて思ったんだけどさ」

「うん」

「原材料のじゃがいものあとに、かつこ遺伝子組換ではないかつことじ、ってついてるけどさ、なんでわざわざそんなこと書くのかね？」

「そりゃ遺伝子組換したじゃがいもだとなんか危険な感じがするからでしょ。遺伝子組換したじゃがいも食べたら、食べたヒトの遺伝子まで組換されそうな気がするじゃない！！」

「そうか！…でも遺伝子組換されたじゃがいもってフツウのとどう違うの？」

「そりゃあ…」

より美味しく！

より大量に！

より大きく！

より形よく！

「…なるようにうまく操作されているのよ」

「より大きく…形よく…」

姉妹はふと、互いの身体のとある部分を見つめ…

「
…」

「
…」

「遺伝子組換のじゃがいも食べればわたしたちの遺伝子も組換わるかね」

「
うう
…」

「
食べたいね」

「
食べたい」

そして、姉妹は遺伝子組換じゃがいもの代わりに仲良く牛乳を啣るのだった。

とある利用者の後悔（前書き）

当時よく流れてた、某金融会社のCMネタです。

とある利用者の後悔

「ご利用は計画的に！」

「忘れな〜いであなたよりも大切なものがある〜」

「え」

「忘れな〜いでお金よりも大切なものはない〜」

「おい」

「なにか？」

「なんか逆じゃね？なんで金の方が大事なんだよ！」

「は！ Σ（。□。ノ）ノ

しまった！！」

「可能な限り最悪の間違いだよな」

「つつい本音が！！」

「そっちかよ！！」

「でもよく考えてくださいね、あなたが一番大切なら、利子なんて付けないじゃないですか、そしたらこの会社そもそもやってけませんよ」

「確かにそうだけどね！」

「ですからおとなしくココに判子押してくださいネ」

「失敗した！！ココ選んだの失敗だ！！」

某アヒルの金融会社窓口嬢と、利用者のやりとり。（フィクションですから）

とある妻帯者の懇願（前書き）

酔っ払いってわけわからないこと偉そうに語るよね・・・という話です。

とある妻帯者の懇願

「憎み憎まれ憎まれ憎み、人間の歴史は争いの歴史だった」

「愛し愛され愛され愛し、人類の歴史は繁栄の歴史だった」

「愛と憎しみは対ではあるが、対極ではない。わかるかね」

「天才と馬鹿は紙一重という言葉があるだろう。天才と馬鹿が紙一重であるように、愛と憎しみもまた、紙一重であるのだよ」

「愛と憎しみを人は内包している。人の心には秤があるのだよ。両天秤に愛と憎しみを乗せて、釣り合いをとっている」

「たとえば指一本の重さであろうともバランスを崩せば天秤ごと人は壊れる。すなわち」

「愛に溺れるか、憎悪にのまれるかだ」

「しかし、だ。バランスを欠く以前に愛も憎悪も知らない人間がいたらどうだろう」

「すべての他者に平等に振る舞う人間。それはある意味においては理想とするかもしれない。しかしそこに人間味というものは皆無だ」

「究極の聖人も究極の悪人も、そういった意味で人間味はない——それはもはや神か悪魔だよ」

「神も悪魔も平等だ。誰も選ばない。手を差し伸べることも引きずり堕とすこともしない」

「選ぶのも決めるのも、奇跡を起こすのも地獄を創るのも……すべては人間だ」

「だからこそ君に問おう」

「誰にでも優しい、というのは、誰にも優しくないと同じではないかね」

「すべてに与えられる優しさは、真実優しさと言えるのだろうか」
「比較対象がいるからこそ、優しいと思えるのではないかね」

「ご高説ありがたいわね。で？」

「いやつまりあの」

「私もアナタに聞きたいの…今いつたい何時かしら？」

「別け隔てなく優しい奥さん！いや奥様！！今こそ人間味を持つために愛する夫を許すべきじゃ…」

「…そうね、比較対象があることは大事だわ」

「！」

「というわけで他人より厳しく接します。覚悟なさい」

「いやいやいやそれは僕の大事な…ぎゃーーーー！！！」

四丁目の真夜中の星空に絶叫は虚しく吸い込まれていった。

とある志願者の回答（前書き）

いつもと毛色が違います。
暗いけど甘い感じです。

とある志願者の回答

「どうせ死ぬなら、誰もいない、誰にも見つからない場所で、藻掻き苦しんでのたうち回って死にたいの」

「…普通、逆じゃないか？皆に看取られて、眠るように安らかに死にたいってのならわかるけど」

「そういう理想の死に方も、あるでしょうね」

——でも私は。

「生まれた時からずっと諦めていて、流されていて、ただただ呼吸をしているだけみたいだった」

「たぶんこれからもずっとそう。だってそれが私の生き方で、望みなんだから」

「生き生きと輝くこともないかわりに、脅威もない」

「期待されることがないから、重荷もない」

「どこにも根を下ろさず、執着せず、誰にも何にも残さない」

——それが、私の理想の生き方。

「だけどね、やっぱり最期くらいは、ああ、生きてるんだなって実感したい」

「藻掻き苦しんでのたうち回ってみつともなく泣き喚いて」

——これ以上ないくらい、自分が生きていることを、見せ付けてほしい。逃れられない苦しみの中で、生きていることを私に、思い知らせてほしい。

それは、途方も無いくらいに私に突き付けられる、生きている証拠だから。

「…で、僕への答えはつまりは？」

「見苦しい姿なんて誰にも見せたくないけれど、あなたにはしょうがないから許すわ」

「何を？」

「私の最期に傍にすること」

随分と遠回りな「プロポーズ」の答えに、僕は笑ってしまった。

——そうだね、残りの人生すべてで、生きてるうちに生きてることを嫌ってくらい思い知るほど幸せにしてみせようか。

とある観測者の懐古

「僕達が観ている星の光」

「きらきらと美しく瞬き、蒼く燃えている幾千のあの光は」

「今も輝いているとは限らない」

「光はとても疾いよ。僕達に手の届く疾さじゃない」

「けれど、あの皓々とした星の光でさえ僕らのいる地上にとどくまでに何年、何百年、何千年、何億年とかかるんだ」

——僕らの観る星は、ずっと昔の星の姿かもしれないんだ。

「そして地上の僕らは、今を、未来に向かって歩き続けている」

「立ち止まる事も許されず、未来にしか進むことのできない僕達が、過去の光を観ている」

「僕はね、そこにとってもとても魅せられてしまっただよ」

満天の星々、星降る夜

遠く、高く、手を伸ばすことさえ躊躇われる、空の至宝。

過去の輝きとはわかっていても、願わずにはいられない。

幾多の人々が、焦がれてやまない。

「…で、なんでアナタは星の話をしながら昔の私の写真を見るのかしら?」

「いや、いやいやいや!最近なんかキミがちょっとこう…」

「…ちょっと、こう?」

「いや誤解だよ!キミは今も昔も美しいよ!…!…!けどちょっとこつぷくよかに」

「…」

「いや今のままでも十分なんだけどね!昔はあと20kgほどスリムだったような気がしてね!…!他意はないんだよ…!…!ってちょっとちよつとちよつと!…!」

「アナタも、だいぶ、ナニか、寂しく、なつたわよね?」

「すいませんすいませんすいませんすいません髪むしらないで!…!…!え!?!それはさすがに…!ぎゃー!…!」

べりいっ！

ガムテープが引き剥がされる音と悲鳴は、
またしても夜の静寂に
溶けて消えた。

とある観測者の懐古（後書き）

・・・実はこの夫婦、前にも出てきたかもしれません。
ひそかにお気に入り。

とある捕食者の慟哭（前書き）

また少し毛色が違います。シリアス？ホラー・・・とは違つかもし
れません。

とある捕食者の慟哭

月が見えない夜でした。鍵がかけられていたはずの窓が音もなく開き、流れ込んできた外の風にカーテンがふわりとひるがえりました。

夜の匂いをまとって私の部屋に入ってきた彼は、それはそれは美しい笑みを浮かべて私に告げました。

「こんばんは。君を食べにきたよ」

もたらされる運命を予感して、身体がふるりと震えました。

“僕は甘いものが大好きなんだよ。砂糖菓子のように甘くて甘くて美味しいものが大好きなんだ。

生まれたばかりの赤ん坊なんかも美味しいよ。優しく甘い匂いがして、まだ柔らかい頭蓋なんて力をほとんど入れなくてもぱかりと碎けるんだ。脳みそも白くておぼろ豆腐みたいに濃厚で素朴な味とするし、骨もこりこりしててね。肉なんて本当にもぎたての葡萄みたいに瑞々しくて歯応えなんてないんじゃないかってくらいに柔らかい。

あとはね、王道だけど生娘かな。いやいや笑わないでよ。若ければいいってもんじゃないんだって。やっぱり一度でも経験があると微妙なくさみがあるんだよ。それがいいってヤツもいるけど僕はやっぱり純粹で清廉な肉の甘さが好きだなあ。真夏のオレンジみたい爽やかな後味が最高だよ。女の子の肌って本当に綺麗だよ。白くてするするした手触りで、桃みたいにつるつと剥けば、芳しい香がする桃色の肉が見えるんだ。赤ん坊ほど柔らかくないけど、やっぱりとろけそうに美味しくて、血の色なんてすごく鮮やかな緋色をしてるから白い肌に映えて食欲をさらにそそるんだよね。宝物みたいに包まれてる心臓はね、そうつと取り出すとまだことごと動いていてね、あつたかくて熟した林檎みたいに赤くてとても綺麗なんだよ。流れてくる血を舐めるとね、ホットチョコレイトのように優しい気持ちになるよ。

君の瞳はとても綺麗だね。ビー玉みたいに透明に澄んでいて、きらきらしている。飴玉みたいに口の中でずつと溶けるまでころがしていたくなるよ。本当に今まで我慢していたかいたがよかったなあ。こんなに素敵に育ってくれるなんて。”

とろけるように幸せそうな顔で微笑んで私の手を取りながら彼は言いました。味見、と悪戯っぽく言い、私の青白い手の甲を赤い舌でちろりとなぞり、満足そうに目を細めます。不思議といやらしさは感じませんでした。

それは、恐らく。

私が、彼にとって。

“僕達ヒトクイの一族はね、君たちみたいに毎日食事をする必要はないんだ。数年に一度、一人を丸ごと食べれば生きていける。そ

の分一回の食事にととても気を遣う。誰だつて食べるなら美味しいほうがいいだろう？だからね、美味しくなりそうな子には「しるし」をつけておくんだ。自分のモノだよ、ってね。せつかく美味しそうな子を見つけたのに誰に盗られてしまったら嫌だろう？君にも君が生まれてすぐに僕のモノっていう「しるし」をつけたんだよ。そう。それ。それが僕の「しるし」だよ。綺麗だろう？赤い蝶々。僕の名前がアゲハだからね、「しるし」もアゲハ蝶にしたんだ。”

私が思うように動かない出来損ないの身体の中で、唯一許せるものは胸元にある、この鮮やかな痣だけでした。

蝶のように見えるそれは、身体の持ち主とは逆に、とても鮮烈で生き生きとしているように思えたからです。

“本当はね、もっと待つつもりだったんだけどね”

その続きは言わなくてもわかります。それに続くコトバは、私自身が一番知っているのです。

数週間。

それが、わたしに残された時間。もしかしたら、明日来るかもしれないその期限。

“僕にとつてヒトが一番美味しく感じられる旬はね、境目なんだ。子供から大人へ、少女から女へ変わる一瞬の境目。どちらともつかない不安定さと曖昧さ、刻一刻と色と味を変える華やかさが、僕はとても好きなんだよ。ただ食べるんじゃないで、すべてを楽しみたいとね。

君のことも生まれた時からずっと見てきたよ。覚えてないかもしれないけど、赤ちゃんの時はしょっちゅう会いにいったんだ。初めて会った時には小さな小さな手で僕の指をしっかりと握って、ふやふやした顔で笑って。本当に可愛かった。あまりにも可愛くてどうしても食べたくなくてね、その時から誰も食べずに君だけを見てきたんだよ。だんだん大きくなる君、手足が伸びて、柔らかな体付きになって、このままずっとずっと見守っていいこうかと思うくらい、君が愛おしく感じたよ。

でも同じくらい、君を食べてしまいたいと思っていた。君の赤い血を舐めて、ピンクの肉を噛んで、白い頭蓋を真珠のように磨いてから口付けたいって。

君は、僕のものだよ。この白い建物に閉じ込められてからずっと、

願っていたらう？叶えてあげる。”

“僕が、君を、食べてあげる。”

私の、願い。

生まれると同時に、死期を予告された、私の。

ここ数年は、この病室から出ることも叶わなかった、私の。

「それならば、お願いします。

血を一滴も残さずに、肉を一欠片も残さずに、骨を一本も残さずに。この世に私を残さずに。私を全部あなたが食べてください。

私を全部あなたにあげましょう」

「何も残せないと思っていました。誰の役にも立てないと思っていました。

だけど最後に食べてもらえるなんて…なんて」

——なんて、幸運なことでしょう。

「それでは、頂きます。愛しいお嬢さん」

「どつぞ...どつぞ召し上がれ」

擦れた呟きは、誰にも聞かれることなく消えていく。

“本当はね、もっと、ずっと、待つつもりだったんだ。
君が、大人になって、恋をして、子供を産んで、幸せになって、
老いて。”

——君が永遠の眠りにつくその日まで。

夜明け前に、こぼれた二つの涙は、流れ落ちて、溶け合った。

とある捕食者の慟哭（後書き）

元は中編だったのですが、あまりにも台詞が少なかったし内心も分かりにくかった上にまとまらなかったもので現在の形に変更しました。
…いつか補足視点として「とある捕食者の幸福」という題名でも書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1307i/>

とある人々の主張

2010年10月12日06時54分発行